

「住田町ふれあい広場」がオープン

三陸中部森林管理署

5月12日(日)、住田町運動公園・ふれあい広場オープンイベントが好天のもと開催され、多くの家族連れで賑わいました。



住田町産材を使用した大型遊具

住田町では世代間交流の促進や子育て支援の充実、交流人口の拡大を目的にこの広場の整備を進めてきており、東日本大震災により気仙地域では子供の遊び場の確保が困難となっていることから、健康増進や生涯学習の拠点エリアとしての利用が期待されます。

住田町役場新庁舎建設予定地の北側にオープンした約0.38haの広場に



- 三陸中部森林管理署
- 由利森林管理署
- 津軽白神森林生態系保全センター

は、住田町産材を使った大型遊具やブランコ、砂場、わき水広場、東屋やベンチなどの休憩施設、みどりが見える芝生の広場があり、遊びを満喫することができます。

会場では関係団体などが各コーナーを開設し、当署からは芝生の広場で木にふれあう体験コーナーを設け、輪切り材などを使った「木のネームプレートづくり」に職員3名が参加しました。朝10時から15時までの間、親子連れや小学生たちが次々に訪れ、思い思いに楽しむ姿が見られました。また、当日は母の日でもあり、「手作りでお母さんに感謝を伝えたい。」と工夫を凝らした作品作りに熱中する小学生もいました。



作品作りに熱中する子供たち

そのほか、パトカーや消防車への乗車体験、キックビンゴゲーム、森のつ

みき広場、クッパ体験、チエンソーアートの実演、住田いいところカルタ大会、ノルディックウォーキング体験、三陸鉄道のキャラクター・さんてつくくん、大船渡警察署の防犯戦隊ケセンジャー、岩手のヒーロー・鉄神ガンライザーの記念撮影会も行われ、子供たちの長蛇の列ができるほどの人気でした。



岩手のヒーロー 鉄神ガンライザー

当署では今後もこのようなイベントに参加し、地域住民の方々に木のぬくもりや自然の大切さを広めていきたいと考えています。

高校生による体験学習

由利森林管理署

由利森林管理署は、平成14年から毎年森林環境教育の一環として、県立矢島高等学校の1年生による体験学習に取り組んでいます。学習フィールドとなる水林海岸林(国有林)は、飛砂や風から市民の生活を守り潤いを与えてきました。松くい虫被害によりその姿が減少しました。

こうした中、高校生が海岸林の再生作業の一部を担うとともに、環境への関心を深めながら地域へ貢献してもらうことをねらいとして、4月23日(火)

と5月8日(水)の両日クロマツ林の本数調整伐を行ってまいりました。この体験学習は、高校における総合学習の一環として「地域の自然にふれあい環境問題を考え合う」というテーマで、毎年春と秋に学校側の要請により実施しています。



藪に入って間伐



間伐木を担いで運び出し

最初に、ノコギリは手前に引くときに切れるので強弱をつけて作業するよう説明すると、生徒達は伐採する木の根元近くを握り地際から切断していききました。次々と伐採されたマツの搬出に苦労したようでしたが、何とか予定区域の作業を終えました。

その後、林業体験の一つとして、トラノ芽狩りや竹林でのタケノコ採りに挑戦してみました。あいにく低温続き



「青池」にて

十二湖は、青森県深浦町にあり白神山地の西側にあります。宝永元年（1704年）の大地震で沢がせき止められてきたといわれています。その時にできた湖沼は全部で33個ありますが、崩山の中腹（大崩）で湖沼を数えると12個見えたことから「十二湖」と呼ばれているとのこと。十二湖は、津軽十二湖自然休養林に指定されており、ブナを主体とする天然林と「青池」をはじめ神秘的な湖沼が美しく、また四季折々の山野草や野鳥など多くの動植物が見られます。

津軽白神森林生態系保全センター
白神山地十二湖巡り

のため収穫は僅かでしたが、山菜採りの難しさを感じながらも、自然の恵みとの出会いを各々楽しんだようです。生徒のひとり「伐採を進めるうちに林の景色が見渡せるようになり、達成感を感じた」と初めての体験を振り返っていました。

この日は、散策にちよいどいい季節で、職員から木々や草花などの説明を受けながら、ニリンソウやエンレイソウなどが咲くお花畑のような道を散策し、また運良くアカシヨウビンの声を聞くことができました。散策を終え、参加者の「また来たい」「よかった」「今度はいつ？」というような言葉やすがすがしい顔をみると、とてもいい1日だったと私たちも感じています。これから、「白神山地」は新緑から深緑への季節、白神の森林に多くの方がふれあいにいられることをお待ちしております。



「ブナ自然林」を歩く

特に今の季節は、新緑や多くの野鳥の囀りが訪れた人たちをいやし、なかでも、アカシヨウビンは「キョロロ」という独特な鳴き声が魅力的で、その姿を撮影しようと多くのカメラマンが、何日もの間湖沼にカメラを向けています。そのようななかで、5月25日（土）当センターでは、自然観察会を開催し、青森市や八戸など県内から32名が参加しました。

Mini Column

オトシブミとチョッキリ

青山 一郎

Ichirou Aoyama

技術普及課長

へえ〜、そうなんだ

新 緑の山道には筒状に巻かれた葉が落ちている。オトシブミが子のために作ったゆりかごだ。昔、手紙を道ばたに落として密かに渡す「落とし文」というのがあったそうで、それが名の由来。夏鳥が到着する頃に見られるので、南の国から鳥が運んできた便りと思えて先人の感性には脱帽する。

身の丈に比べて巨大な葉を巻くのは大変なようで一巻き作るのに結構な時間をかけるが、一つの揺籃（ようらん）に生み付けるのは一卵のみ。「落とし文」が完成して落下させるとすぐに次の葉で仕事を始めるタフガイだが、産卵数は多くはない。

ハマキチョッキリも葉を巻いてゆりかごを作るが、こちらは複数の葉を使ったやや雑なもので、葉柄を囓りはするが落とさない。結構な大きさが萎れた葉の固まりといった感じであまり目立たない。

ハイロチョッキリはドングリに産卵した後、ドングリの付いた枝をかみ切って落とす。果樹の害虫として有名なモモチョッキリも同様に枝を落とすが、チョッキリと枝を切るのが愛嬌のある名の由来。手塩にかけた果樹の枝先をかみ切られた恨みもあったはずだが、達観した命だ。

オトシブミもチョッキリも大きく括ればゾウムシの仲間の遠い親戚。なぜ、子供達の食料を萎れさせてしまうのか、切り落とさなければ瑞々しいまま食べられるのに、と疑問だった。食害などのダメージを受けた植物は、毒を出したり、堅くなったり、不味くなったり、天敵を呼んだりするそうだが、これらの植物側の防御に対抗してのことだという。かまわずに黙々と食べ続けて大量発生と収束を繰り返す連中に比べれば、慎ましいが安定した生き様は、長い時間をかけて彼らが身につけてきた戦略なのだろう。



オトシブミ



ピロウドアシナガオトシブミ



ヒゲナガオトシブミ



イタヤハマキチョッキリ



ドロハマキチョッキリ



ハイロチョッキリ